

---

## 14. 都市型エコミュージアムの実現めざした研究・実践活動（継続2年目）

津山・城西まるごと博物館研究会  
(岡山県津山市)

---

### I. 活動の背景と目的

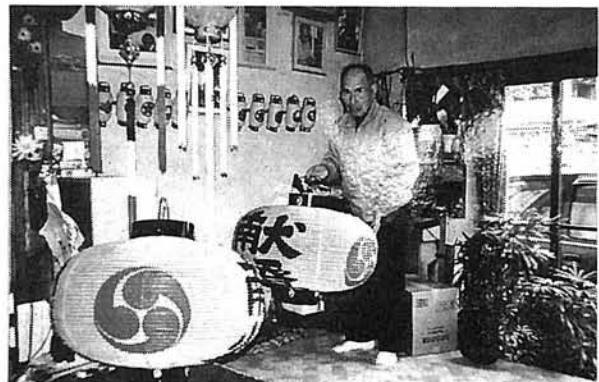
津山市の中心市街地は城下町として発展し、歴史的町並みを有し、地域コミュニティや、手仕事などの暮らしが息づいているまちです。

しかし、昭和30年ごろからのモーターゼーションの中で、日本の多くの中小都市にみられる中心市街地の空洞化が津山市でも生じています。中心部では多くの地区で高齢化率30%を超えています。

この津山市の中心部の西に位置する城西地区は明治、大正期に津山で一番賑わった地区です。姫路から出雲を結ぶ出雲街道の沿線には昔ながらの町家が連なり、その西側には寺町があり、現在も15のお寺が独特の空間を形成しています。加えて、地区内には明治、大正期に建てられた銀行、病院などの近代建築の建物も点在し、歴史が重層した町並みを形成しています。また、提灯、畳、仏具など昔ながらの手仕事を中心とした生業も息づいています。

数年前より、市民グループ「津山まちづくり市民会議」が中心となり、活性化の研究に取り組み、「暮らしが活きるまちなみ博物館」構想として取りまとめ、平成8年9月には、この構想の実践として、地元町内会と合同で、「津山・城西まるごと博物館フェア」を開催したところです。

その後、平成8年11月に地元の有志と市民会議のメンバーが集まり、年1回のイベントだけではなく、地域全体を1つの博物館として常時紹介する都市型のエコミュージアム「津山・城西まるごと博物館」の実現に向けた取り組みをしようと「津山・城西まるごと博物館研究会」を結成し、この間、地区の生業の調査、取りまとめ、情報発信などの活動を行ってきました。研究会では地区にある作州地方の工芸品を展示し、研修室も備えている作州民芸館をコアミュージアムに、地区の町並みやお寺、手仕事を生業とされているお店をサテライトミュージアムに、地区を東西に貫く出雲街道や路地をディスカバリートレイルと位置づけています。



サテライトミュージアムの一つ  
(手仕事が生業のお店)

平成10年度はこの活動をより恒常的にまた、より地元根づいたものにするために力を入れながら活動展開してきました。

### II. 活動の内容

津山・城西まるごと博物館研究会では、平成10年度の活動として

- ① イベント「津山・城西まるごと博物館フェア」の継続開催
- ② 地域の調査と情報発信
- ③ 城西まるごと博物館の常設に向けた活動

の3つの方向で取り組んできました。

第1のイベントの開催ですが、地元と「まるごと博物館構想」の共通理解と交流を図るため、2年前より毎年秋に「津山・城西まるごと博物館フェア」を開催しており、今年も9月19日・20日の両日開催しました。地元町内会と実行委員会を組織し、4月から十数回の会合を重ねながら企画をつくりあげていきました。今年は城西地区が最も賑わった大正時代にスポットをあて「大正ロマンの薫る町『城西』」をテーマにクラフトフェアや骨董市、大正グッズの展示や蓄音機コンサート、映画上映などを開催、多くの参加者で賑わいました。回を重ねるごとに人通りも増え、城西地区の恒例イベントとして市民に浸透してきています。



城西フェア・ミルクホール



城西フェア・クラフトフェア

次に第2の地域の調査と情報発信ですが、昨年度、ホームページ「津山・城西まるごと博物館」を開設し、今年度も随時内容更新、充実を図ってきました。ホームページを通じての問い合わせも多く、情報発信には大きな役割を果たしています。地域の調査では、9月に開催した「博物館フェア」でお寺めぐりのスタンプラリーを企画し、7月と8月にかけてそのためのお寺の調査、コース選定の調査活動を行いました。フェア当日は、8つのお寺を会場に地元老人クラブの方がスタンプの世話をし下さり、お年寄りとお子たちとの交流の場ともなりました。

次に第3の城西まるごと博物館の常設に向けた活動ですが、7月に作州民館の斜め前の空き家を借り受け「GAYAGA家（がやがや）工芸品販売部」を開設しました。

この施設では、地元の手仕事の品物や秋の「博物館フェア」に出品される工芸家の作品を展示、販売し「津山・城西まるごと博物館」のミュージアムショップと位置づけているところです。週1回と毎月第3土曜日に開設してきました。工芸品の販売による自主財源を確保しながら運営し、この施設を核として手仕事やまちづくりのネットワークを広げていきたいと考えていたところですが、週1回の開設では収益をあげるどころまでは程遠い状態でした。そのため、今年1月より月毎のテーマを決め、コアミュージアムと位置づけている作州民芸館での展示、講座などと連動させながら月の第3週1週間の開設を行ってきました。1月は「暦と干支」、2月は「お雛まつり」、3月は「お彼岸」をテーマに開催したところです。「暦と干支」では、郷土玩具の干支の展示や干支についての講座を開催。

「お雛まつり」では地元のお家に眠っている古いお雛さまの展示や現代作家の雛人形の展示、販売、ワークショップを開催。「お彼岸」では和ろうそくや仏様の展示、販売やお寺めぐり案内の開催などを行いました。

### Ⅲ. 活動の効果及び今後の課題

平成10年度は昨年の課題であった「まるごと博物館」をより恒常的にまた、より地元に基づいたものにする事ができるかをテーマに活動展開してきました。

この間、イベントや行事などを地元新聞が好意的に取り上げてくれ、また、「GAYAGA家」を開設したことで、実際に目に見える形で活動が見え、地区内でも津山市の中でもこの取り組みについての知名度や理解度が上がっています。また、インターネットを使っての情報発信により、全国的にも私たちの活動を紹介することができ、問い合わせ、視察なども相次いでいます。昨年12月には、(財)地域活性化センターが取材にみえ、地域活性化ビデオ「パートナーシップで地域の未来をひらく」の中で事例として紹介されるなど反響が広がっています。

今年度は特にミュージアムショップの開設により、地域の歴史・暮らし・手仕事をつながりながら工芸品の販売による自主財源を確保しながら運営し、この施設を核としてまちづくりを広げ、発展させていくというコミュニティビジネスとしての可能性を考えたところですが、採算ラインに乗せ事業展開を図っていくところまでは及びませんでした。しかし、今年1月からの月毎のテーマを決めての取り組みによりコアミュージアム作州民芸館との連携もできショップの収益も上向いてきているところです。また、商店会と連動した取り組みや地元の有志がお寺を案内をしてくれたり、講座の講師になったりといった広がりも生まれてきています。現在、今後の運営について、論議しているところですが、ある程度リスクを覚悟してより積極的な事業展開を図るか、それとも他にも財源を求めながら、現在の年1回のイベントと月毎の取り組みを継続しながらボランタリーな関わりの中で博物館構想を実現していくのか、岐路に立っているところです。どちらにしても、城西まるごと博物館の地元の理解者、支援者を増やす中で方向を定めていきたいと考えています。

昨年9月の博物館フェアが終わり、反省会も終了した10月17日未明から台風10号の通過で津山市は大きな被害を受けました。城西地区でも作州民芸館のある旧城下町地区はほとんどのお宅が床上浸水の被害にみまわれました。被災後2日目に私たちの活動仲間が中心となり災害ボランティア本部が組織され、その後1ヶ月間に約5千人の方々がボランティアとして支援に駆けつけて下さいました。また、地区の被災を受けなかった地区から青壮年、消防団の方々が被災地に駆けつけ、連日の支援が続ききました。地方小都市で特にまちづくりの



GAYAGA 家の開設



城西フェア・コンサート

分野では町内会を中心とした縦型の社会が根強く残っていますが、この間の城西の取り組み、災害でのボランティアの取り組みでは縦型社会の伝統、義理、人情と横型のネットワーク、フットワークが相互にからみあって進んでいます。こういったところに将来の活路を見出しながら進んでいきます。